

## 伊豆大島の火山活動解説資料(平成26年11月)

気象庁地震火山部  
火山監視・情報センター

GNSS<sup>1)</sup>による観測では、地下深部へのマグマの供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いています。2011年頃から鈍化していましたが、2013年8月頃から再び膨張傾向がみられます。その他の観測データには特段の変化はなく、噴火の兆候は認められません。  
 山体の膨張が継続していることから、今後の火山活動に注意してください。  
 平成19年12月1日に噴火予報(噴火警戒レベル1、平常)を発表しました。その後、予報事項に変更はありません。

## 活動概況

- ・噴気など表面現象の状況(図1 - 、図5)  
 北西外輪に設置してある遠望カメラによる観測では、剣ガ峰付近や三原山中央火孔、三原新山北側などでごく弱い噴気が時々認められています。  
 14日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内及びその周辺でごく弱い噴気が引き続き確認されています。
- ・火口内の状況(図1 - 、図2 - 、図6)  
 14日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内にある中央火孔の最高温度<sup>2)</sup>は約31で、1999年以降ほぼ同じレベルで経過しています。また、中央火口内の地表面温度分布<sup>2)</sup>は、前回(10月17日)の観測と比べて特段の変化は認められません。その他、三原山山頂周辺の噴気温度にも特段の変化は認められません。
- ・地震や微動の発生状況(図1 - 、図2 - 、図4)  
 火山性地震の発生回数はやや少ない状態で経過しています。震源は、主に三原山周辺の浅いところに分布しています。  
 低周波地震や火山性微動は観測されていません。
- ・地殻変動の状況(図1 - 、図2 - ~ 、図3)  
 長期的には、GNSS<sup>1)</sup>による観測で、地下深部へのマグマの供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いています。2011年頃から鈍化していましたが、2013年8月頃から再び膨張傾向がみられます。  
 最近の変化をみると、GNSSによる観測では、2013年8月頃からの伸びの傾向が、2014年1月頃から停滞気味でしたが、2014年8月頃から再び伸びの傾向がみられます。また、体積ひずみ計<sup>4)</sup>による観測では、2013年8月頃からの伸びの傾向が続いています。

1) GNSS(Global Navigation Satellite Systems)とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

2) 最高温度は赤外放射温度計、地表面温度分布は赤外熱映像装置をそれぞれ用いて観測を行っています。いずれの装置も、物体が放射する赤外線を検知して温度を測定する測器で、熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

3) マグニチュード(M)は地震の規模をあらわします。この値は暫定値で、後日変更することがあります。

4) センサーで周囲の岩盤から受ける力による体積の変化をとらえ、岩石の伸びや縮みを観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等で変化が観測されることがあります。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ(<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>)でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料(平成26年12月分)は平成27年1月13日に発表する予定です。この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学及び独立行政法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』『数値地図25000(行政界・海岸線)』を使用しています(承認番号:平23情使、第467号)。

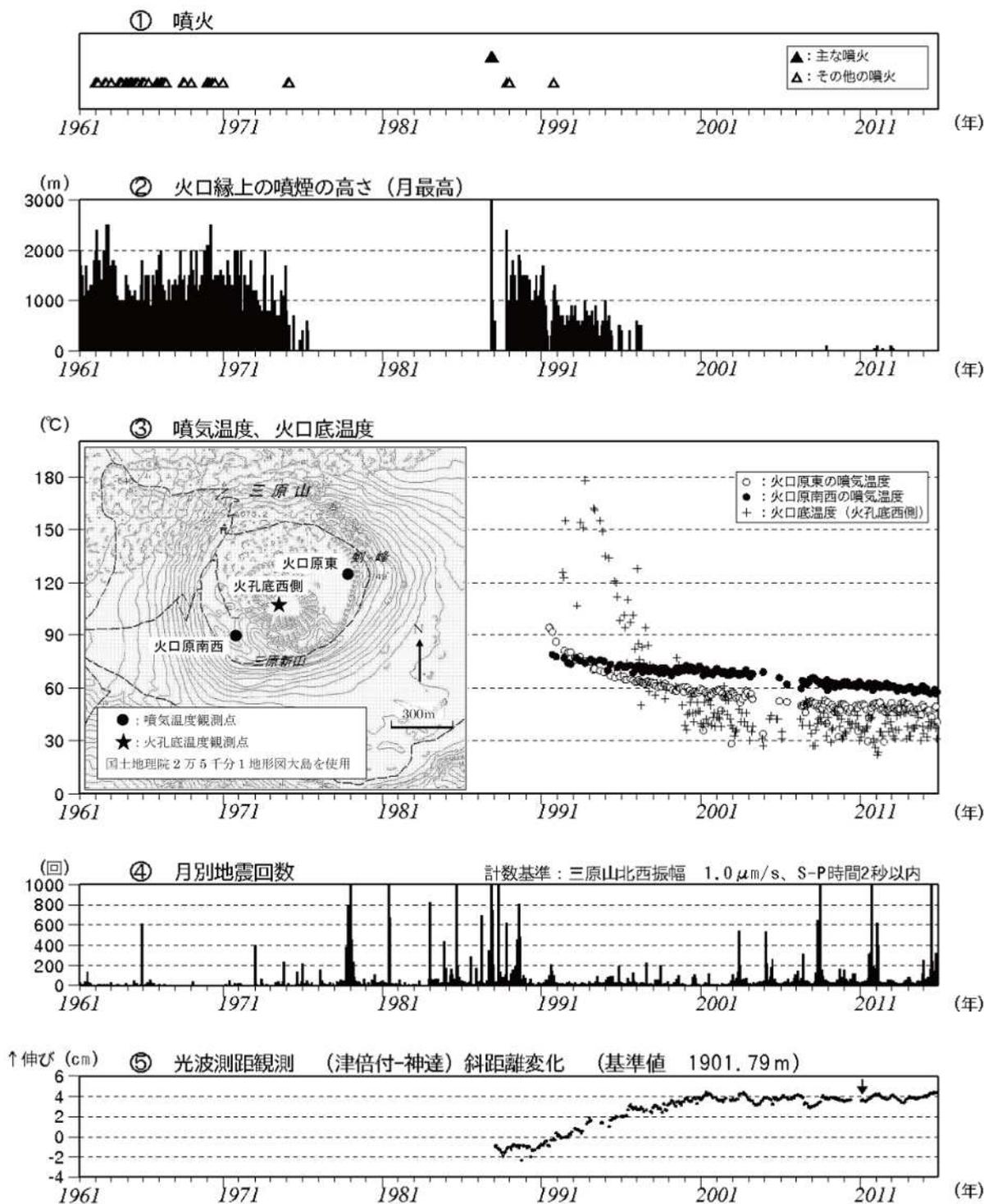


図1 伊豆大島 長期間の火山活動経過図(1961年1月~2014年11月30日)

1991年12月18日までは火口縁上130m以上、2002年2月28日までは火口縁上300m以上の噴煙の高さを観測していました。

火口底温度(火口底西側)は赤外放射温度計を用いて離れた場所から測定した値。

噴気温度(火口原東、火口原南西)はサーミスタ温度計を用いて直接測定した値。

地震回数には伊豆大島周辺海域で発生した地震も一部含まれています。

光波距離計<sup>5)</sup>による月平均値(観測開始は1987年1月)。グラフの空白部分は欠測。矢印は機器更新を示します。

5) レーザなどを用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定する機器。山体の膨張や収縮による距離の変化を観測します。

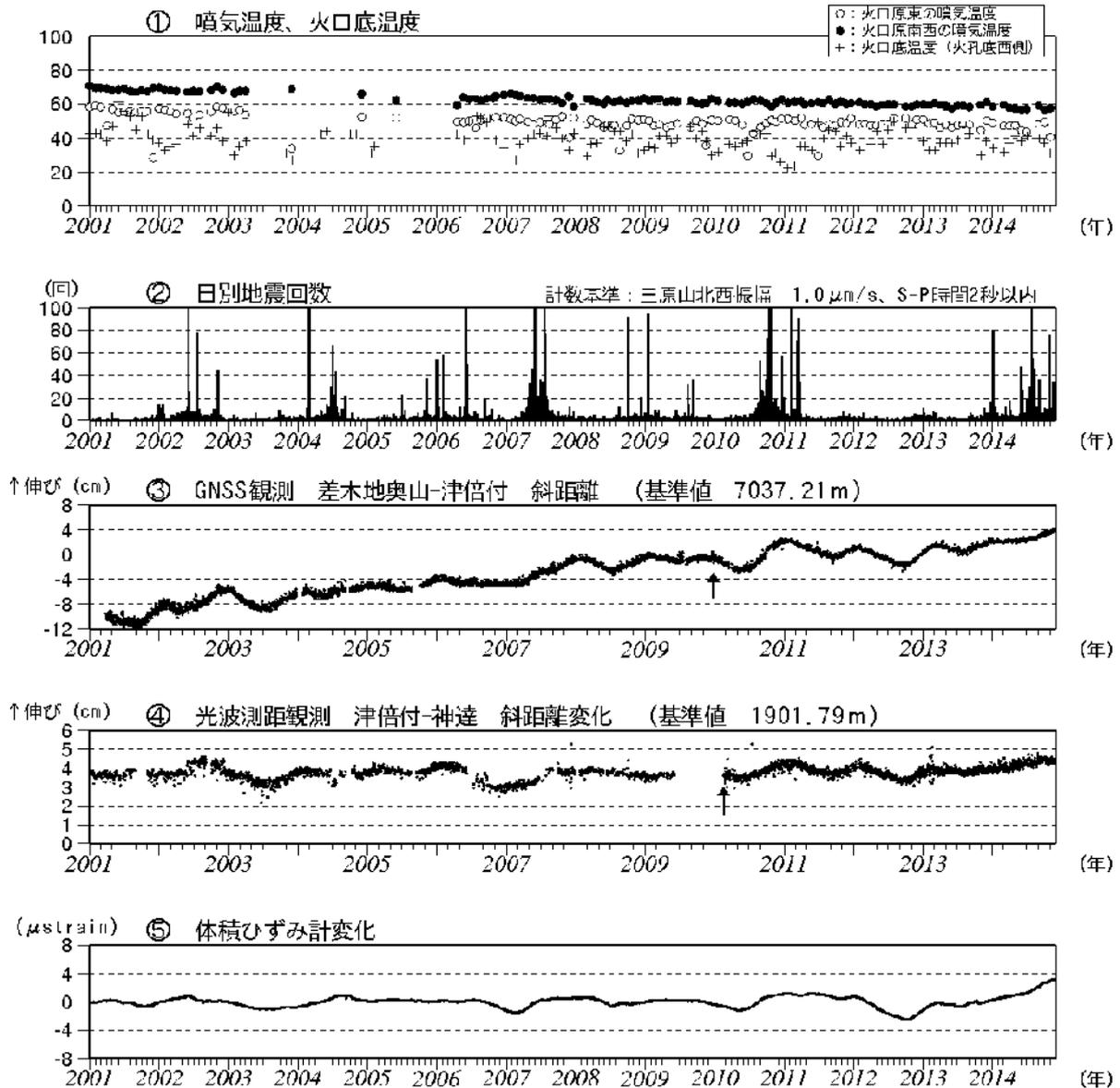


図2 伊豆大島 最近の火山活動経過図(2001年1月~2014年11月30日)

火口底温度(火口底西側)は赤外放射温度計を用いて離れた場所から測定した値。

噴気温度(火口原東、火口原南西)はサーミスタ温度計を用いて直接測定した値。

GNSS連続観測による基線長変化(観測開始は2001年3月7日)。

2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

は図8のGNSS基線 に対応。

グラフの空白部分は欠測。矢印は差木地奥山支柱工事を実施。

光波距離計による日平均値。グラフの空白部分は欠測。矢印は機器更新を示します。

体積ひずみ計による日平均値。補正の方法について見直しを実施しました。このことにより、2014年に入ってからの伸びの傾向がみえるようになっています。

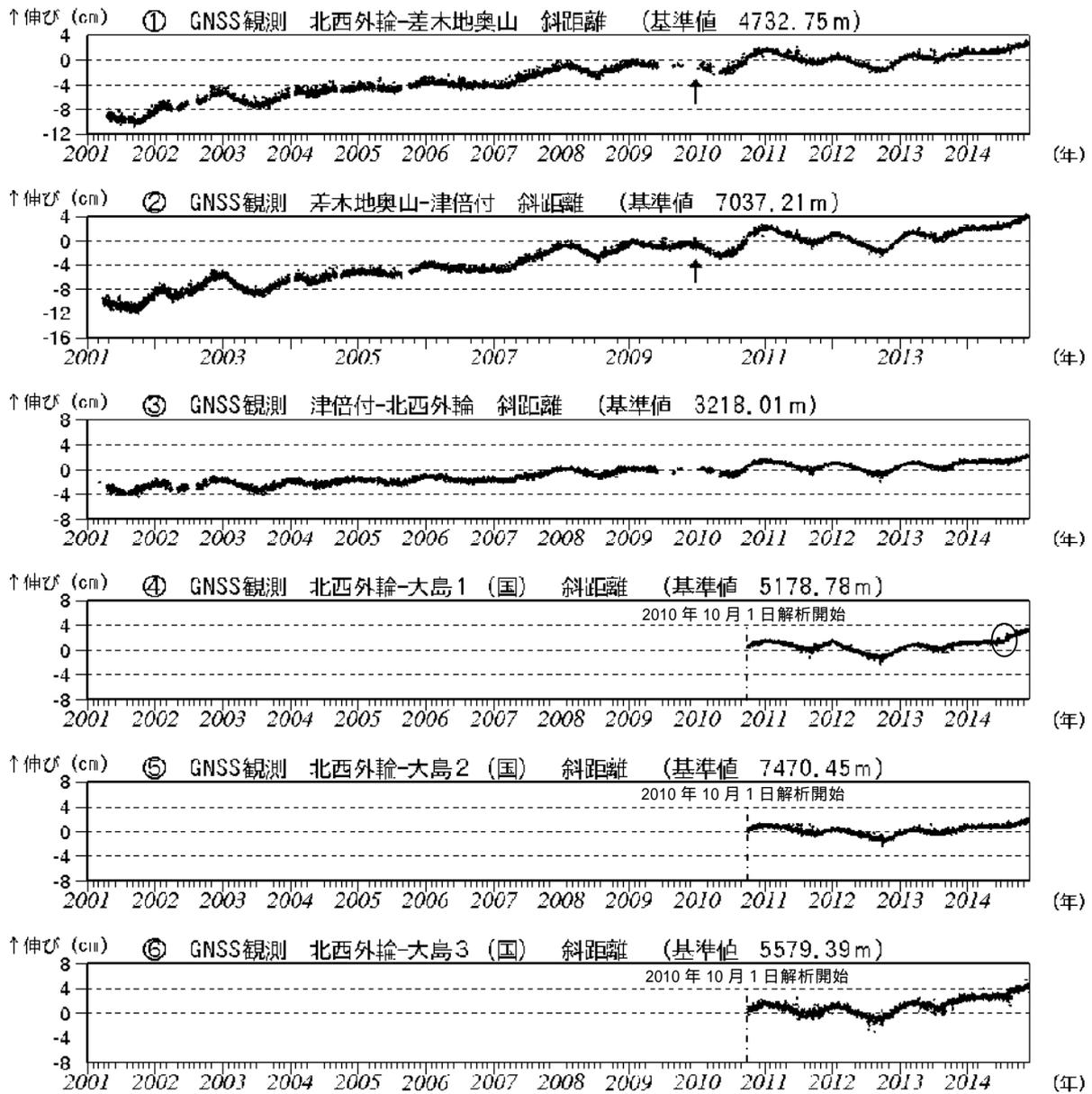


図3 伊豆大島 GNSS連続観測による基線長変化(2001年1月~2014年11月30日)(国): 国土地理院

2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。

～は図8のGNSS基線～に対応しています。

グラフの空白部分は欠測。

の矢印は差木地奥山支柱工事を実施。

のグラフで7月28日頃みられる変動(丸印)は地震活動の活発化に伴う大島1観測点の動きによるものと考えられます。

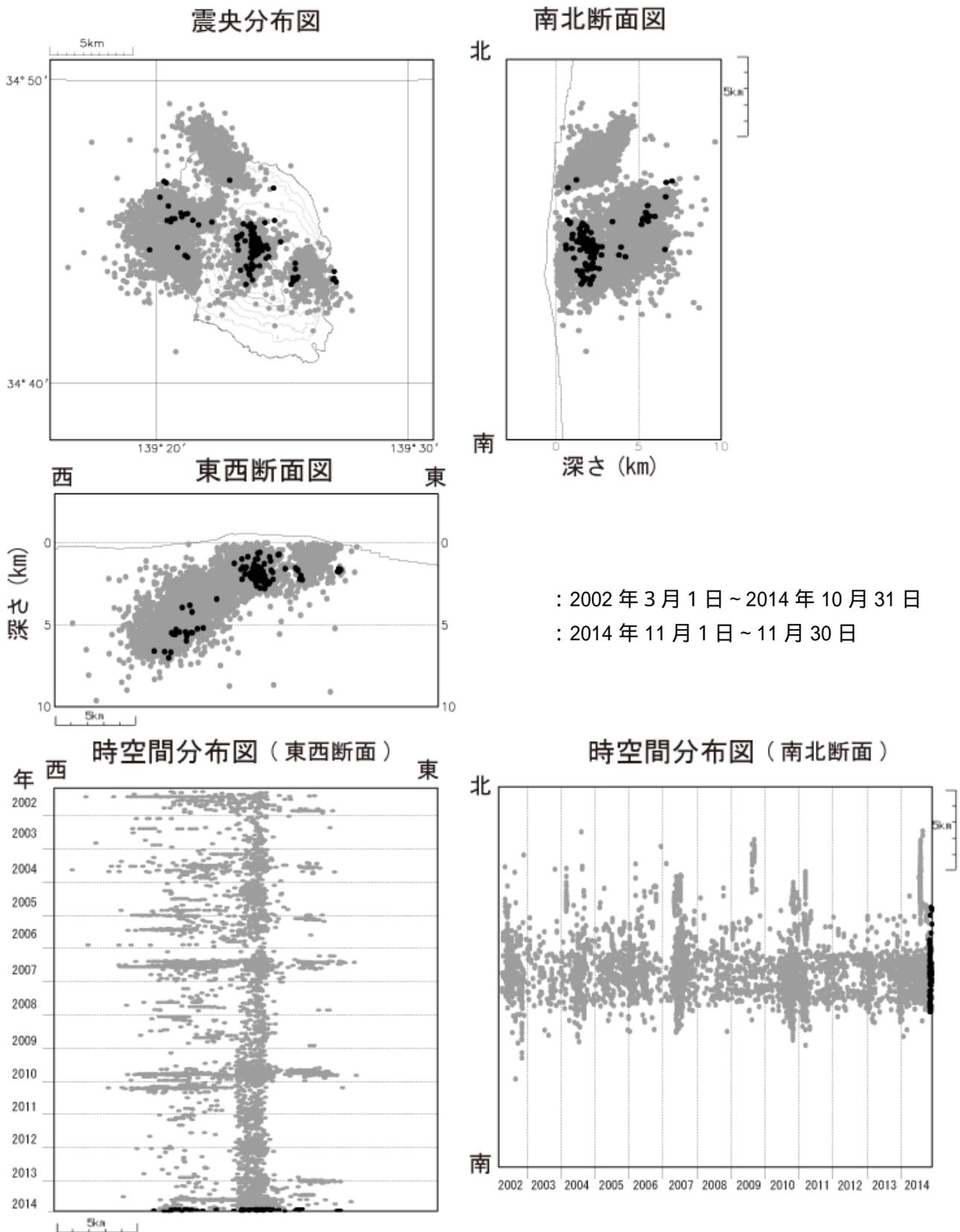
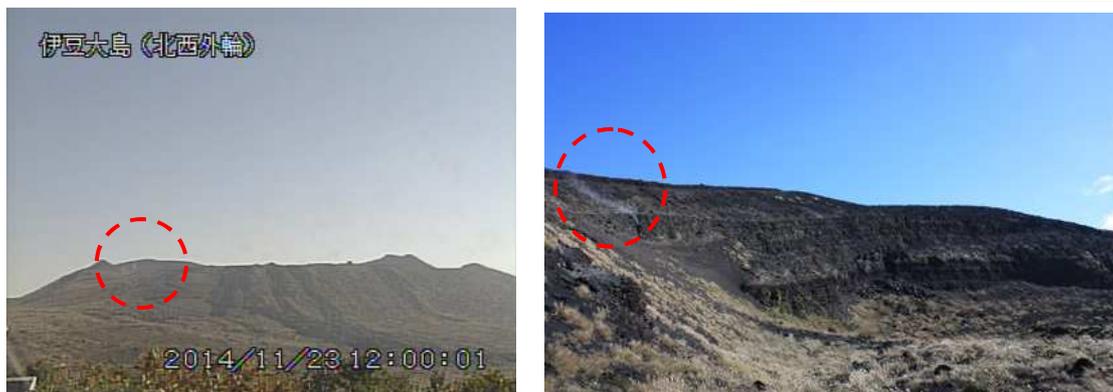
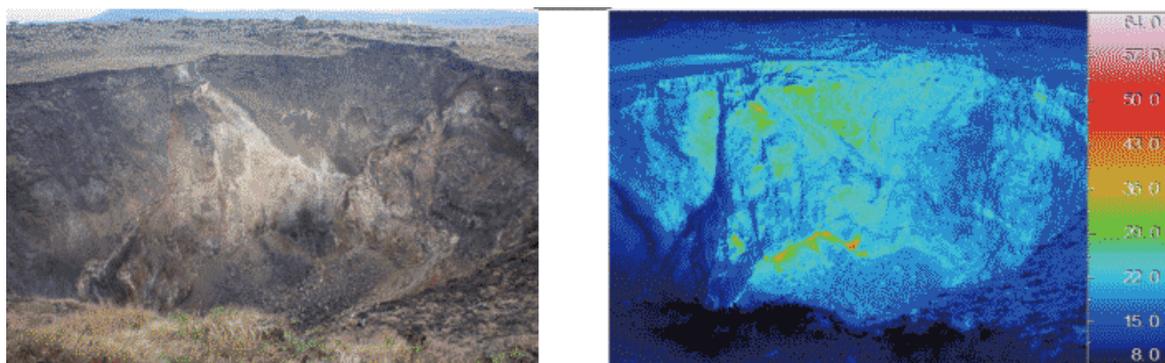


図4 伊豆大島 震源分布図(2002年3月1日~2014年11月30日)

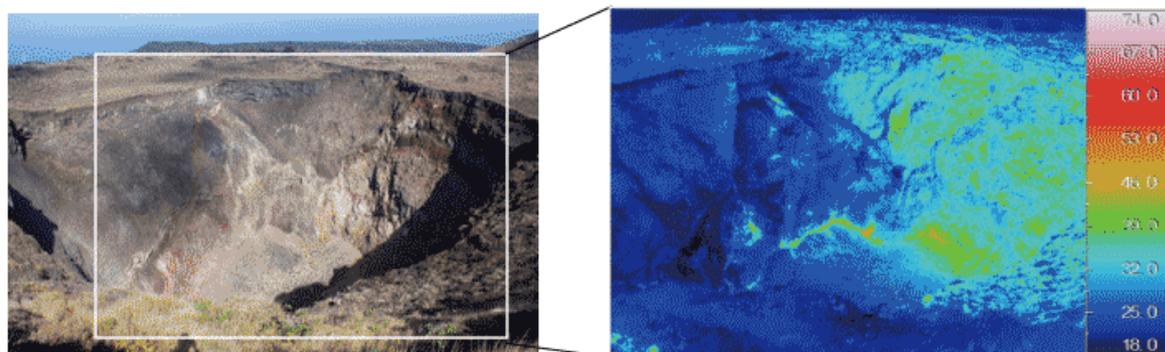


山頂部(11月23日、北西外輪遠望カメラによる) 剣ガ峰付近(11月14日、撮影方向は図7参照)  
 図5 伊豆大島 三原山山頂部及び山頂火口の状況 破線円内:ごく弱い噴気



2014年11月18日の火口内の可視画像

2014年11月14日11時49分撮影



2014年10月28日の火口内の可視画像

2014年10月17日14時27分撮影

図6 伊豆大島 中央火口内の状況(左)と地表面温度分布<sup>2)</sup>(右)

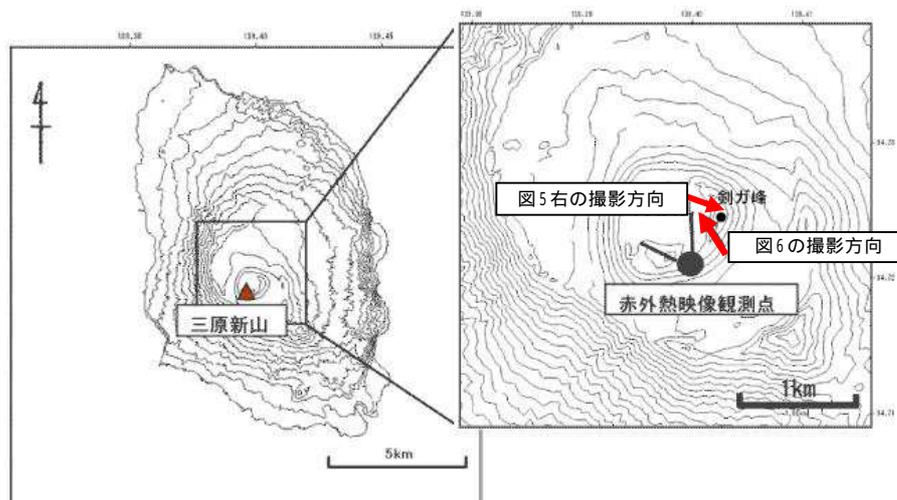
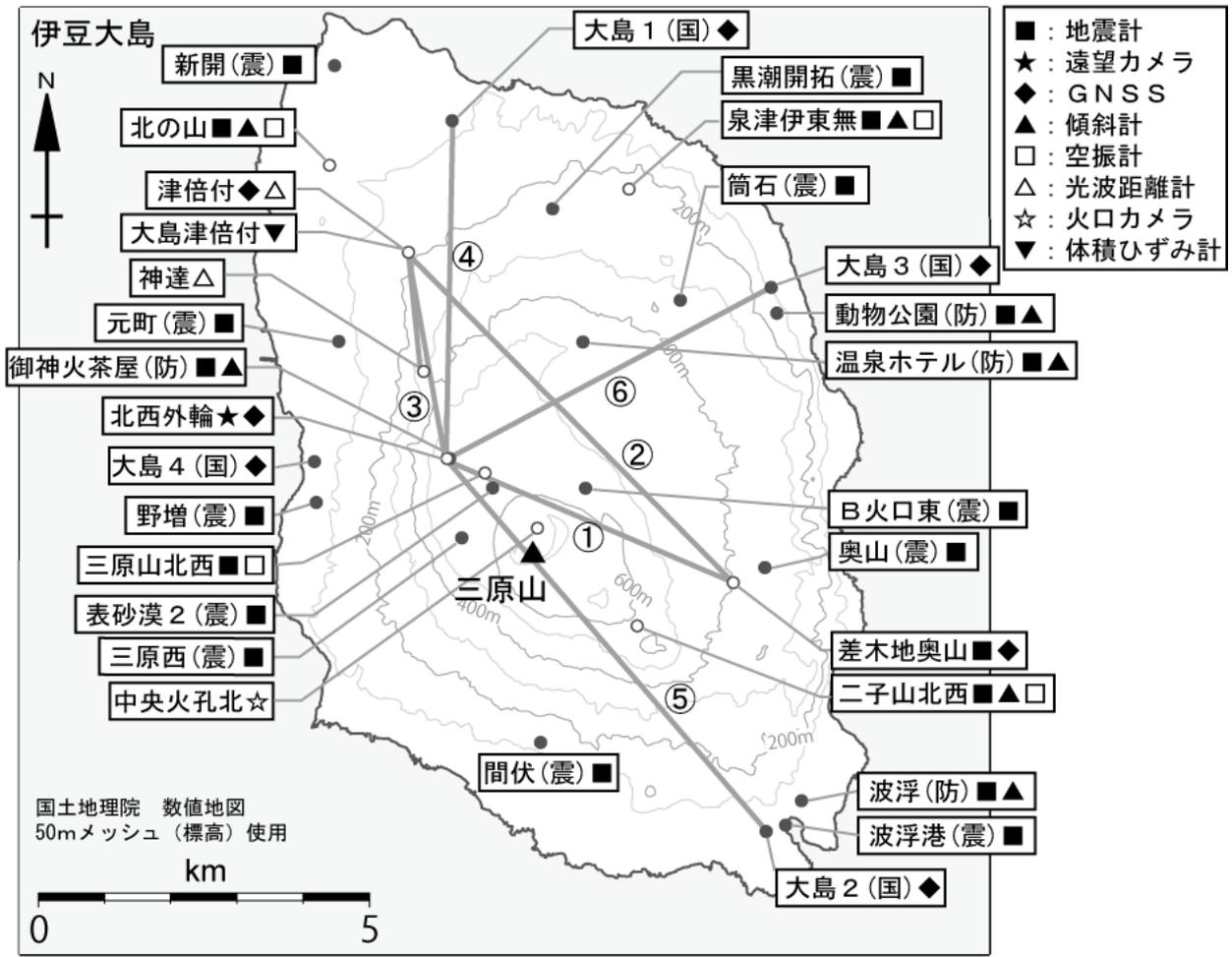


図7 伊豆大島  
 現地調査での観測地点



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
 (国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所、(震)：東京大学地震研究所

図8 伊豆大島 観測点配置図

図中の ○ は図2のGNSS基線 ○ に対応しています。

図中の ~ は図3のGNSS基線 ~ に対応しています。